

「つぐみひげの王さま」

父の王さまは、自分のむすめが人びとをあざけり、結婚をもうしこみに集まった人に、なんくせをつけるばかりなのを見て、とてもおこりました。そして、**(二)んなむすめは、だれでもいいから、城の門にもごいに来た男にくれてやる**)と、心のなかできめました。それから二、三日して、ひとりの芸人がほどこしをもらうために、**城の窓の下で歌いはじめました。**王さまはこれを聞くと、

「その男を、ここへよびいれなさい」といいました。

やがて、きたない身なりの芸人が入ってきました。そして、王さまと王女の前で歌を歌い、それがおわると、何かほどこしをいただきたいといいました。王さまは、

「おまえの歌はたいそう気に入った。では、ここにゐるわしのむすめを、おまえの妻にあたえよう」といいました。

王女はぎょうてんしました。けれども、王さまは、

「わしは、おまえをだれでもいいから城の門にもごいに来た男にくれてやると、心のなかできめていたのじゃ。その誓いをわしはまもるつもりじゃ」といいました。

『語るためのグリム童話3』小澤俊夫監訳／小峰書店

つぐみひげの王は、芸人に身をやつして城にやって来ます。彼は娘の結婚相手の条件にびたりと一致していました。

「仙人の教え」

息子は、長者の家により、

「長者どの、あなたの娘さんの病は、娘さんがはじめて顔をあわせた人を婿にすれば、たちまちなおるそうですよ」と、仙人のおしえをつたえてやりました。長者が、

「おお、それはありがたい。では、ひとつ、あがってお茶でも飲んでいってくれ」というので、息子は座敷にありがとうございました。お菓子をだされ、お茶をのんでいると、**次の間に寝ていた娘が、ふすまをあけて、**

「わたしのことで、ありがとうございました」といって、はうようにしてでてきました。

そして息子と顔をあわせたたん、腰もしんとして、歩けるようになりました。長者は、

「娘がはじめて顔をあわせたのは、蓄えだ。病気もなおったから、せ蒜になつてくれ」といいました。

『日本の昔話5』小澤俊夫再話／福音館書店

主人公が、長者の娘の婿の条件に一致しています。

「炎の馬」

「アイヌの若者よ、わたしのいうことを、よくききなさい。これから、アペメルとカンテユウのふたりの兄が、あなたをためすことになるでしょう。その試練にたえられたら、わたしたちは結婚できます。たえられなかったら、わたしたちは夫婦になることはできません。わたしのもっている宝物を、あなたにさずけましょう。まさかのときに、やくだつはずです」

神の娘はそういって、一本の扇をくれました。扇の片面には氷の絵がかいてあり、もう片面には太陽の絵がかいてありました。

・・・・略・・・・

わたしはたちまち炎につつまれ、いまにも焼け死にそうになったので、神の娘がくれたあの扇をとりだし、氷の絵のほうであおぎました。すると、冷たい風と氷がふりそそぎ、すこしも熱さを感じなくなりました。

・・・・略・・・・

わたしはさつと氷の馬にとびのり、神の国の上のはてめぎして走りだしました。

けれどもわたしはたちまちこおり、いまにもごこえ死にそうになったので、神の娘がくれたあの扇をとりだし、太陽の絵のほうであおぎました。すると、氷はたちまち音をたててとけおち、その音は、雷鳴のようにあたりにひびきわたりました。

『日本の昔話5』小澤俊夫再話／福音館書店

扇は、神の娘からの贈り物です。これにどのような力があるのか、もらったときにはわかりませんでした。けれども、その力は、主人公が試練に立ち向かうときの助けとなりました。贈り物の力が、主人公の困難を解決する条件に、ぴたりと一致したのです。